

#### 4) 今後の課題

##### 【ケアプラン作成に関して】

- ①訪問介護を適切に位置づける
- ②要介護の側面など問題点だけに目向けるのではなく、  
利用者の意欲や積極性を引き出す(エンパワメント)「夢プラン」の発想
- ③利用者・家族の異なる思いを尊重しながら、時間をかけて  
納得いく話し合いを促すような、利用者尊重のコミュニケーション能力の発揮
- ④利用者・家族の要望を重視しながら、  
収集情報も参考にした多面的で柔軟なプランニング
- ⑤生協の事業にかなったアセスメントシートの選定

33

##### 【モニタリングに関して】

- ①定期&随時を組み合わせた頻回で柔軟なモニタリング
- ②優先順位を設定し効率的なモニタリング
- ③ヘルパーによるモニタリングの役割を重視
- ④大事なものは利用者・家族との十分なコミュニケーション
- ⑤他事業者からのヒアリングや情報交換を重視
- ⑥家庭訪問を第一に考える

34

#### 4. 通所介護事業(その1)

##### 1) 通所介護事業と訪問介護事業を同時に行う効果

###### 【 A プラスの効果 】

###### ▼利用者にとって

- ①2つのサービス利用希望に応えやすい。
- ②きめ細かな対応ができる。

###### ▼事業所にとって

- ①利用者の状況を、違った視点から把握できる。
- ②サービス間の情報交換や連携がしやすい。
- ③人材の相互活用ができる。
- ④地域への生協のアピールに役立つ。

35

##### 1) 通所介護事業と訪問介護事業を同時に行う効果

###### 【 B マイナスの効果 】

###### ▼利用者にとって

特になし(マイナス効果は思い当たらないとの記述もあり)

###### ▼事業所にとって

(2つの事業を行うことによるマイナスの効果ではない)

- ①利用者数が10人前後の場合、  
通所介護事業は経営的に厳しい。
- ②単独施設の場合、損益が悪い。

36

## 2)通所介護事業の意義

### ▼利用者にとって

○引きこもりや社会的交流の乏しい利用者にとって、コミュニケーション、生きがい、やる気、他人への思いやりを取り戻す機会となる。

### ▼地域住民にとって

①(一般住宅で開所しているため)事業内容への理解や「老い」に対する関心を引き出し、ボランティアの募集につながっている。

②地域への総合的な福祉サービスの拠点として認知されるようになる。

### ▼事業所にとって

①行政へのアピールが効果的にできる。

②ヘルパーの研修施設として有効活用できる。

37

## 3)先駆的取り組みと独自の工夫

①一般住宅を活用

②10人程度の「大家族」的集団構成と個別ケア

③スタッフとのコミュニケーションを重視

④100%、コープ商品の昼食とおやつ！

⑤コープの店舗へ買い物の介助

⑥とにかく身体を動かす

⑦(介護保険外で)一泊旅行や季節行事のお楽しみ

⑧(冬の季節)和室のコタツで、横になってもらう

38

#### 4)現在の課題

- ①送迎時間を短縮したいが、送迎車が足りない
- ②行事や、重度痴呆の利用者の個別ケアに人手不足
- ③人件費比率が高く採算の見通しが立たない  
→介護報酬の改善が必要
- ④個別メニュー、緊急時マニュアル、  
職員研修プログラムの作成
- ⑤スタッフの適性をふまえた人材配置
- ⑥短期入所と併設しており、人員体制が複雑
- ⑦民家改造型で施設・設備の不備により  
利用者の要介護度の進行にともない支障が目立つ

資料3.

# 事例から見たホームヘルパー の行う家事援助の 有効性と専門性

## 事例から見たホームヘルパーの行なう家事援助の有効性と専門性

ホームヘルパーが行う家事援助の専門性と有効性について、検証するために事例調査Ⅰ(※1)を行った。その結果を踏まえて、生協における訪問介護サービスの到達点や課題を明らかにするアンケート調査(※2)及び事例調査Ⅱ(2002年2月～3月/本資料)を実施した。

### 【事例調査Ⅰ ～ホームヘルパーの行なう家事援助が有効である事例調査報告】

9事例から、利用者の状態や医療サービスとの関係、家事援助内容、家事援助の特徴、他のサービスとの違い・関係、援助の効果について分析した。その結果、ホームヘルパーが行う家事援助には、利用者の自立生活支援につながる共通した援助の特徴(アプローチ)がみられた。

#### <自立生活支援につながる家事援助における共通のアプローチ>

ホームヘルパーが行なう家事援助は、利用者の状態に合せた料理をつくり、買い物、洗濯や掃除(環境整備)などを行う過程において、食生活を豊かに楽しませようとするなどと同時に、利用者の心身の状態を観ながら、訪問介護計画の援助目標にもとづき意図的なコミュニケーションを図る、見守る、共に行う、リハビリなど様々な目的行為を兼ねたものである。

取りあげた事例を現在の介護保険下において普遍的・有効的に機能させていくには、以下の課題が示された。

- ①訪問介護がケアプランにおいて位置づけられ、訪問介護計画に基づいた家事援助を実施していくことが必要である。そのために、サービス提供責任者やケアマネジャーはホームヘルパーと適宜連携を図り、ホームヘルパーによるモニタリングの役割を重視することが求められる。
- ②家事援助は生活の基盤であり、身体介護や相談援助と共に提供されることで様々な効果を生むが、その中で予測される身体面、精神面、生活面、家族との関係などの状況悪化に対して、「予防的な視点」をもった家事援助を中心とした援助の重要性を示す必要がある。

### 【アンケート調査の報告】

生協が対象としている利用者の要介護度構成は、要支援と要介護度Ⅰで6割近くを占めていること、予防的な対応の重要性、訪問介護計画作成や実施・修正など全ての段階でサービス提供責任者がホームヘルパーと協働すること、ケアマネジメントにおけるホームヘルパーのモニタリングの必要性などが示された。

## 【事例調査Ⅱ ～ホームヘルプにおける予防的視点の有効事例及び事例調査Ⅰの経過報告】

上記のような経過から、家事援助の有効性と専門性を検証するために、5生協より「ホームヘルプにおける予防的な視点が有効である事例」を15事例得た。さらに、事例調査Ⅰの9事例も合わせて、以下の観点から事例を選定した。

### <事例調査Ⅱから3事例>

- ①ホームヘルパー・サービス提供責任者・ケアマネジャーが連携を図る中で、予防的な視点が家事援助により、有効に機能している。
- ②家事代行とは異なることを示すために、要支援の利用者の場合、利用金額がわずかでも、ホームヘルパーが行う家事援助は利用者の自立生活を支援していることがわかる。
- ③家事援助を中心とした援助により、どのように利用者の生活や要介護度が改善されていくのかが明確になっている。

### <事例調査Ⅰから1事例>

家事援助が、訪問介護計画に基づき身体介護や相談援助と統合的に提供される過程において、生活面・心理面・社会面・身体面が相互に影響し、自立支援に結びついていった典型例であり、家事援助共通のアプローチが明確になっている。昨年度の調査以降も、継続した援助により、さらに効果が高まっている。

※1) 「ホームヘルパーの行う家事援助が有効である事例調査報告」『介護保険制度における家事援助の位置づけ等を中心とした生協の要望 一要望書および参考資料一』

日本生活協同組合連合会 組織推進本部 福祉事務局、P9～P43、2001年8月

※2) 一資料2 「介護保険事業等運営状況アンケート調査の分析～利用者中心の訪問介護を求めて：その到達点と課題について～」『地域購買生協の介護保険事業等の事業状況アンケート調査報告』 P11 ～ P30、2002年1月

以下の方にご協力頂いた

#### 事例提供者

生活協同組合コープかながわ  
生活クラブ生活協同組合千葉  
生活協同組合エスコープ大阪  
生活協同組合コープこうべ  
生活協同組合ひろしま

#### 調査実施・分析担当

柴田 範子 上智社会福祉専門学校 専任教員  
鳶末 憲子 埼玉県立大学保健医療福祉学部社会福祉学科 助手

## <ホームヘルプにおける予防的視点が有効である事例>

### 【事例A】

ケアマネジャー・ホームヘルパー・サービス提供責任者の連携によって、サービスが有効に提供された事例

措置制度が10年ほど続いていた方で、要支援時は家事代行的な援助だけであって改善には繋がらなかった。コープが関わり日常生活の観察などから区分変更申請し（要介護2）、糖尿・膝関節変性症の悪化や精神的な不安面に配慮しながら関わることで少しずつ安定してきた。チームケアによりディサービスの利用も増して、社会参加を高めることで精神的にも安定してきた。

### 【事例B】

家事援助を中心としたホームヘルパーの関わりで、生活の維持ができ要支援で踏みとどまっている事例

家事をしてくれていた夫が死去し、子供との不仲から精神的ストレスを抱えている利用者に対し、体調の良し悪しを観ながら援助方法を工夫した対応を図ったり、ケアハウスへの入所が実現した中で、施設内での生活上の困難をヘルパーと共に解消することによって、精神面も含めた生活の維持が可能となった。

### 【事例C】

要介護2であったが、ホームヘルパーの関わりの中で要介護度が1に改善された事例

めまいによる精神的不安感や足腰の痛みによる外出困難などを家事援助と利用者を尊重したコミュニケーションを図る事によって、介護度が2から1に改善された。

## <ホームヘルパーの行なう家事援助が有効である事例の追跡調査>

### 【事例D】

家事援助が身体介護や相談援助と統合的に行なわれる事によって効果が出ている事例

脳梗塞（失語や視野狭窄・物忘れ）の妻を介護していた夫も倒れ、不適切な食事により糖尿病になった。強い不安を抱えた利用者や介護疲れの娘に対し、相談援助や食事援助など身体介護、買い物や調理、掃除などの家事援助アプローチにより、利用者の心身両面が安定し、生活上の障害にも対応できるようになり、娘や夫との関係も良好になった。

#### ※ 家事援助アプローチとは

ホームヘルパーによる調理や買い物、洗濯や掃除（環境整備）などの家事援助を行なう過程において、家事援助本来の目的（利用者の状況に合った料理をつくり、食生活を豊かに楽しみがもてるなど）と同時に、利用者の心身の状態を見ながら、援助目標にもとづき意図的なコミュニケーションを図ったり、見守りを行なう、共に行なう、リハビリを兼ねるなど、訪問介護計画に基づく家事援助を通じた統合的なアプローチを意味している。



【事例A】 ホームヘルプにおける予防的視点が有効である事例

ホームヘルパー・サービス提供責任者・ケアマネジャーによるチームケアにより将来に対する予防的視点で、区分変更を申請し家事代行的な援助だけから通院介助・デイサービスなどのサービスを提供することで状態が安定してきた事例

I 利用者の方について

性別	男・ <input checked="" type="checkbox"/> 女	年齢	80歳	要介護度	要支援 要介護度 I・ <input checked="" type="checkbox"/> II・III・IV・V
家族構成	<input checked="" type="checkbox"/> 独居・高齢夫婦・高齢同士（夫婦以外）・高齢でない複数世帯・ その他（長女：大学教授、次女：医者、三女：ご主人が会社経営者）				
主な病気	糖尿、膝関節変性症（だんだん悪くなっている）				
身体的な障害の状態	神経痛など毎日痛みがはしる。糖尿のため週1回、膝のため整形外科に週1回通院。（ヘルパーの通院介助）				
精神的状態	不安定（身体的原因と日常の出来事が原因かと思われる。） ヘルパーが行かない日は、電話をあちこちかけまくる。病院・消防署・子供どもも寝てなさいと言われ、最後にケアサポートセンター青葉にかけてくる。担当ケアマネがいると安心して精神的に落ち着く。				
生活上の困難	経済的には困難さはない。 独居の寂しさが問題。（独居で7～8年になる）				
現在の派遣区分	身体介護・身体家事・ <input checked="" type="checkbox"/> 複合型介護・複合型家事・家事援助				
望ましい派遣区分	身体介護・ <input checked="" type="checkbox"/> 身体家事・複合型介護・複合型家事・家事援助				
利用サービス	<input checked="" type="checkbox"/> 通所介護・短期入所・訪問看護・巡回入浴・訪問リハビリ・福祉用具 住宅改修・配食・その他（ ）				
インフォーマルな支援	なし				
介護保険の利用金額	11,687円	介護保険外の利用金額			
利用者の願い・要望	気に入ったヘルパーに訪問して欲しい。自分のわがままを聞いて欲しい。自分の不安に答えて欲しい。				
家族の願い・要望	デイサービスの利用を増して、気分転換をはかって欲しい。				
その他特徴的なこと					

## Ⅱ 訪問介護について

●援助開始の理由・現在までの経過（背景、居宅介護支援計画や要介護度の変更なども含めて）

- ・精神的不安が原因でなかなかヘルパーと上手な関係作りが出来なかった。
- ・介護保険を期に事業者変更。
- ・家事援助週3回3時間づつ、及び通院介助週1回3時間、ディサービスを週1回利用。

●援助目標（訪問介護計画の目標）

- ・生活全体の援助と心身の安定が図れるような働きかけ、気持ちが動くような働きかけをしながら、社会への参加を高める。
- ・利用者の状態が不安定なので、家事援助全般を通じた支援により、利用者の生活を整えていく。

●具体的な援助内容を詳しく（生活状況、利用者や家族の要望なども踏まえたホームヘルパーとしての考え方や援助の組み立て、働きかけがわかるように）

- ・家事援助（買い物、掃除、洗濯、調理、くすりを取りに行くなど生活全般）→複合介護（通院介助、見守り等）
- ・家事援助週3回3時間づつ、及び通院介助週1回3時間、ディサービスを週1回利用。
- ・利用者からの信頼が得られるに従い、通院の介助を頼まれる様になり、週2回の通院を加える。
- ・3人の娘さん達は、社会的に活躍されていることから、母親へのかかわりを密に出来ない状況がある。母親としては、誇りに思っているものの、寂しい気持ちは身体面の苦痛と相まって取り除けないでいる。その寂しさをヘルパーにぶつけることが多く、共感的理解と受容する姿勢で対応している。
- ・ヘルパーは利用者の気持ちが理解できる様になり、極力利用者の要望を受け入れている。
- ・通院時にドクターから同席を依頼され、一緒に話しを聞きながら、メモをとる。（病院も電話で何回も聞いてくるので、ヘルパーさんも一緒に聞いて欲しいとの要望もあり、立ち合って記録もとっている。）

●援助実施上の留意点

- ・会話や様子から、その日の状態を把握した上で、援助をする。
- ・援助に依存することのない様、自立への働きかけをする。
- ・守秘義務については徹底する。
- ・掃除などを丁寧に行なうこと。

●予防的視点の必要性和具体的な内容（利用者の短期的・長期的な変化を予測していることがわかるように）

- ・集団的行動が苦手な方なので、彼女に合った社会との関わり方を見出し、集団にても行動ができるような援助も加えているが、本人はまだ納得していない。  
→ディサービスの利用回数を増やす。
- ・家事援助としてヘルパーが定期的に入ることによって、利用者の自立が芽生える
- ・集中的にサービスを提供し、その改善が図られた後、サービスを少なくしていく。